

# 愛知県内のレッドデータブック掲載種の分布状況

○井城雅夫 原田弥生（元環境調査センター）

## 1. はじめに

野生動植物を取り巻く環境は、開発等による土地の改変、里山に代表されるような人と自然とのかかわり方の変化、外来種の侵入、シカの食害など様々な要因により変化しており、その変化により絶滅、あるいは絶滅のおそれのある種が多数存在しているとされている。

近年、生物種の絶滅が問題視され、絶滅のおそれのある種についての資料集としてレッドデータブックが世界レベル、国レベル、都道府県レベル等で作成されている。愛知県でもこれまでにレッドデータブックを平成13年に植物編、平成14年に動物編を作成し、平成21年に改訂版として植物編と動物編を作成した。

これまでレッドデータブックを作成した過程で、専門家や調査者から提供されたレッドデータブック掲載種の生育生息情報をもとに、愛知県のレッドデータブック掲載種の分布状況について調べた。

## 2. 調査対象分類群と方法

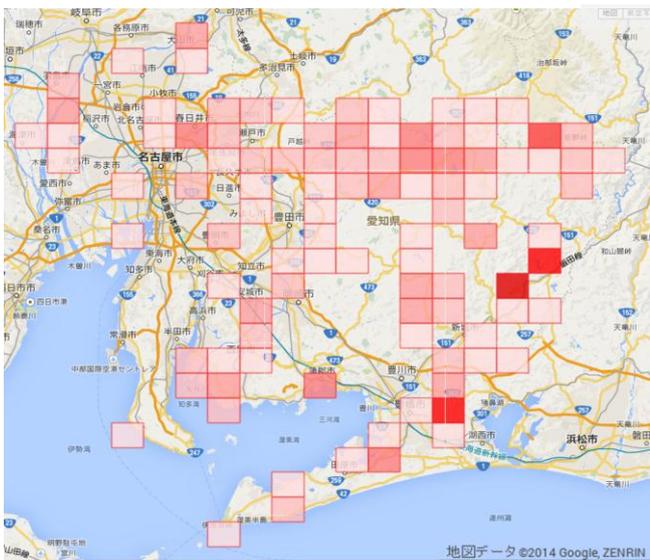
対象とした分類群は、レッドデータブック作成のための検討会委員から情報提供のあった蘚類、苔類、哺乳類、鳥類、両生類、は虫類、淡水魚類、昆虫類、クモ類、貝類である。レッドデータブックに掲載されている種は、絶滅のおそれが高い順に、絶滅危惧ⅠA類、絶滅危惧ⅠB類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧のランク分けがされており、それぞれの種の評価は「レッドデータブックあいち2009」の評価を用いた。

提供されたレッドデータブック掲載種の生息生育情報のデータをマイクロソフト社のエクセルに格納しデータベースを作成し、データベースの検索結果を愛知県統合型地理情報システムで地図上に表示や解析ができるようにした。

作成したデータベースを用いて地域ごとのレッドデータブック掲載種の種数を、5倍メッシュ（約5km四方）ごとに集計して、レッドデータブック掲載種の分布状況を調べた。また、環境省が行った第5回自然環境保全基礎調査植生調査の植生自然度の3次メッシュデータ（約1km四方）についても、合わせて愛知県統合型地理情報システムに取り込み、重ね合わせて解析を行った。

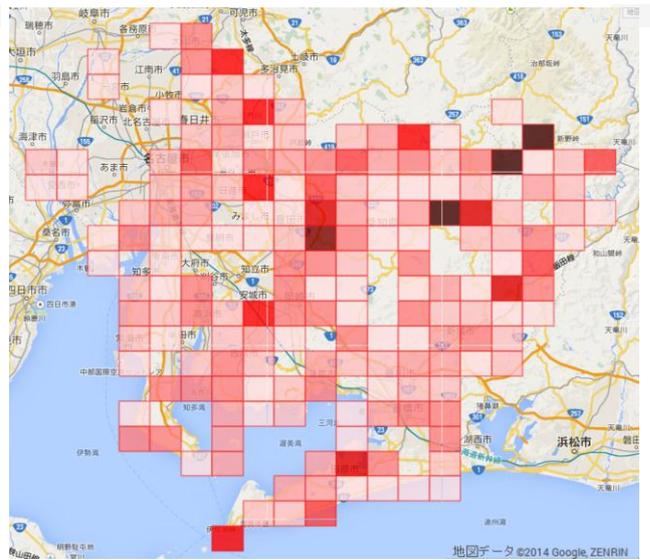
## 3. 結果と考察

自然度の高い照葉樹林やブナ林、石灰岩地といった県内では少ない環境を有する場所では、絶滅危惧ⅠA類やⅠB類といったより絶滅のおそれの高い種が多くみられる傾向があった（図1、図2）。瀬戸市から岡崎市にかけての主に農地を含む植生自然度2、主に植林地を含む植生自然度6や主に2次林を含む植生自然度7が混在するところでは、絶滅危惧種Ⅱ類及び、準絶滅危惧とされている種が多くみられる傾向があり、汐川干潟、矢作川河口干潟、藤前干潟などの干潟では、準絶滅危惧とされている種が多くみられる傾向があった（図3、図4）。



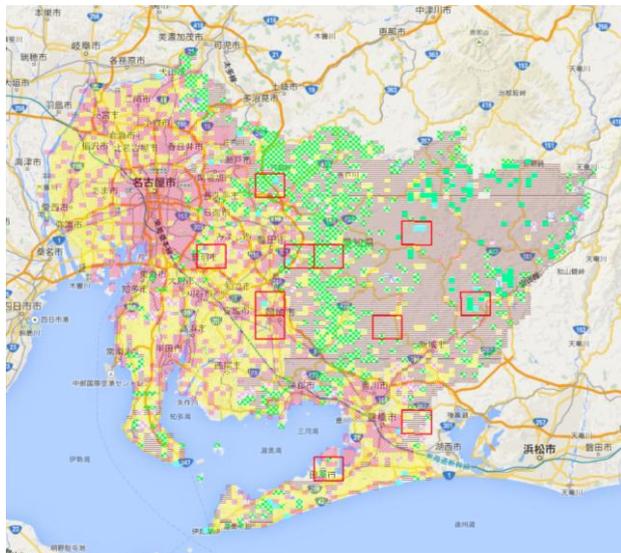
1種 7種

図1 絶滅危惧 I A類の確認状況



1種 10種以上

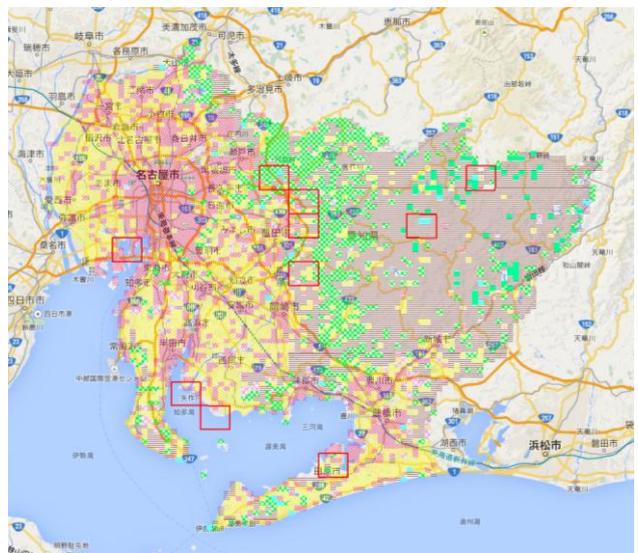
図2 絶滅危惧 I B類の確認状況



植生自然度1
  植生自然度2
  植生自然度6
  植生自然度7

絶滅危惧 II類が多く確認されたメッシュ

図3 絶滅危惧 II類が多く見られた  
主なメッシュと植生自然度



植生自然度1
  植生自然度2
  植生自然度6
  植生自然度7

準絶滅危惧が多く確認されたメッシュ

図4 準絶滅危惧が多く見られた  
主なメッシュと植生自然度